２．研究の詳細

プロジェクト名	たたら製鉄に纏わる民間伝承をモチーフとした空間造形の研究～英国人彫刻家アンソニー・カロの制作プロセスを参考として		
プロジェクト期間	平成 23 年度～平成 24 年度		
申請代表者 (所属講座等)	阿部 守（美術教育講座）	共同研究者 (所属講座等)	

①研究の目的

鉄の造形素材としての可能性を追究するものである。本研究では、たたら製鉄に纏わる数々の民間伝承をモチーフに空間造形へと繋げる実験的な試みに挑戦した。

②研究の内容

わが国の各地に伝わる、たたら製鉄に関する民話等の伝承を調査し、フィールドワークを踏まえた分類・分析を試み、それらを踏まえることにより、どのように空間表現として、鉄を用いた表現として成立させることが可能であるか、そのプロセスを研究するものである。

2 年間の研究計画における 1 年目は、文献調査を柱に、空間造形におけるコンセプトの確立に主眼を置き、制作現場を通した空間造形の制作を中心に研究を展開した。「鉄山必用記事」は 1784 年伯耆(現鳥取県)の下原重仲により著わされ、現代に伝えられた「近世たたら製鉄法」の古典である。それを下地とし、出雲地方に伝わる「金屋子神信仰」「菅谷たたら山内」等のたたら製鉄に纏わる民間伝承のイメージに基づき、実験考古学的な手法により、少量の鉧を得るための実験を行うことから捉えられるたたら製鉄の「精神性」を学んだ。

＜作品＞　　2012 年 1～2 月　　DOMANI-明日　展　国立新美術館　東京

島根県出雲地方に古くから伝わる、たたら製鉄に関する民間伝承について、その文化的意義と空間造形に対し、どのようなモチーフとして結びつけることができるか、について研究を進めた。それらから得たイメージに基づき、鉄を用いた空間造形の創作研究へと展開した。

地形、植生、水の流れ、土壌などすべての要素は常に変化の過程にあって、ランドスケープの状態を特徴づけるコンテクストはどんな「平坦な」場所にもいくらでも隠れている。それらを読み取っていく感性を、「知識と技術」として開発し、現実の橋渡しをするための社会的道具を提供することが、空間造形・環境芸術・建築さらに産業デザインの基本的な役割であると考える。　　また、本研究は今日の図工科「造形あそび」の指導内容である環境・場と結びついた造形活動に関する教材研究に資するものである。

鉄は、21 世紀の現在においても先端技術の宝庫といわれているが、たたら製鉄とは、我が国古来の製鉄方法であり、その独自性において現在でも技術的に高く評価できる。約 40 年にわたり鉄を素材に空間造形を行ってきたが、その中でも 2004 年に、初めて古代製鉄法の研究として、たたら製鉄を実践できた経験は、この北九州文化圏に暮らす制作者として、鉄の由来を理解する上で貴重な経験であった。1784 年に下原重仲によって著された『鉄山秘書』によれば、当時の鉄文化に対する人々の深い信仰・畏敬の念が良く分かる。鉄の文化は天から授かったもの、という捉え方が存在し、そこから多くの伝説や宗教儀式などとして民衆の中に浸透していった。

空間を創造する行為とは、コンテクストと身体との間に関係性を与える「場所と時間」に対し、材料を選定し、さらに構造化していく作業である。その集大成として、2012 年 1～2 月に行なった 2 つの研究発表は、本プロジェクトの実践研究の象徴的な作品として位置づけられる。ひとつは、文化庁・国立新美術館主催で開催された 8 名の美術家が選出された「DOMANI - 明日」展への出品である。美術館の空間に、鍛造によって制作した鉄作品によるインスタレーションを展開した。さらに、北海道及び東北北部における縄文文化とアイヌ文化についての、約 10 年に及ぶフィールドワーク調査を踏まえ、そのイメージから制作した、札幌市の文化財である「清華亭」を舞台とした作品発表である。深い雪の庭園をサイトに、札幌のかつての泉が存在した水源である場 - 「ヌプサムメム」に、鉄と木を用いて、地の神に捧げる立体作品を意図して制作した。

③研究の方法・進め方

地形、植生、水の流れ、土壌などすべての要素は常に変化の過程にある、といえる。ランドスケープの状態を特徴づけるコンテクストはどんな「平坦な」場所にもいくらでも隠れている。それらを読み取っていく感性を、「知識と技術」として開発し、現実の橋渡しをするための社会的道具を提供することが、空間造形・環境芸術・建築さらに産業デザインの基本的な役割であると考える。さらに今日の図工科「造形あそび」の指導内容である環境・場と結びついた造形活動に関する教材研究に資するものである。空間を創造する行為とは、コンテクストと身体との間に関係性を与える「場所と時間」に対し、材料を選定し、さらに構造化していく作業であるという観点から、鉄を用いた空間造形に結びつけるイメージを獲得し、作品として空間造形を成立させた。前述の 2 発表は、上述したコンセプトをベースとして、実践研究したものである。また、英国の鉄彫刻家・アンソニー・カロの古代ギリシャを題材にした彫刻「トロイ戦争」シリーズに制作プロセスの方法を学んだ。

彫刻家のイメージ創出の試みとそのプロセスは、詳細なる場と歴史の調査と素材・空間の獲得から形成され、イメージの展開の仕方、素材選定の方法が詳細に研究できた。

④成果

2012 年開催の大学美術教育学会において、「鉄の造形思考」と題して、研究発表を行った。自身の鉄に関する取り組みをメルロ=ポンティやガストン・バシュラールの論考を参考に展開した。

2 年間の主要な制作発表は、23 年度「札幌・個展（TEMPORARY SPACE）」「赤間・LIGHT-YEAR 展（コンビニ空店舗）－研究室学生との取り組み」「沖縄・DRAWING COMMUNICATION（沖縄県立芸術大学芸術

資料館)」「横浜・個展（爾麗美術)」「東京・文化庁主催 DOMANI 展（国立新美術館)」「札幌・ヌプサムメム展（清華亭)」、24 年度「横浜・個展（爾麗美術)」「沖縄・DRAWING COMMUNICATION（沖縄県立芸術大学芸術資料館)」「カトマンズ・KATHMANDU INTERNATIONAL ART FESTIVAL(METRO PARK)」「福岡・福岡市美術館/福岡県立美術館主催 福岡現代美術クロニクル（福岡市美術館)」「福岡・個展（wwwod gallery)」

＜作品＞

2012 年 1～2 月　　ヌプサムメム　清華亭　札幌　　（作品の一部）

2013 年 1～2 月　　福岡現代美術クロニクル　福岡市美術館　　（作品の一部）

2012 年 11～12 月　ネパール KATHMANDU　INTERNATIONAL　ART　FESTIVAL / METRO PARK　（作品の一部）

○本報告書は、本学ホームページを通じて学内外に公開いたします。
○本経費により作成された成果物や資料等については、必ず全て添付願います。
○研究テーマが２ヶ年計画の場合は、本報告書を平成２５年度審査会の判断材料の一つといたします。